

## 石坂さんへ

秋元秀紀

石坂さんへという「呼びかけ」で始める文面のメールを、いったいどれほど書き送っただろう。とりわけ専修運営を一緒に考えるようになったこの10年ほど、さまざまな問題の解決に知恵を絞る過程でずいぶんやりとりをしました。どんなことであれ、「石坂さんへ」と書き始めると、とりあえず安心感を得られたものです。いつものように、まあ、いいじゃないか、気にしなさんなという応答を期待して、ふうっと一息つくことができましたから。ところが案に相違して、几帳面なですます調で問題解決を説く理詰め返信に、思わず居ずまいを正すことも間々あった。

石坂さんは私が職を得た翌年、1992年に本学にやって来た。生え抜きの私は指導を受けてきた先生たちに囲まれていて、いささか窮屈な思いをしていた。そんななかで、初めて〇〇先生ではなく〇〇さんと呼ぶことのできる同僚が石坂さんだった。「それでいい？」と訊ねると、破顔して許してくれた。あの頃からずっと石坂さんに頼り切っていたんだと今さらながらに思う。関大に職を得たのは私の1年あとだったけど、私より10ほど年長で、すでに教育経験が豊富だった石坂さんは、新米教員の愚痴に辛抱強く耳を傾けてくれた。必ずビールのグラスをあいだに挟んで。そしてたいてい「まあ、いいんじゃない？ そんなあ気にすることない」と言ってくれた。

父権主義的な厳父とはほど遠いけれど、ことほどさように父性の人だった。亡くなる一ヶ月ほど前、最後に受け取ったメールも、指導していたゼミの学生のことを気遣うものでした。お子さんたちに思いを残して逝ってしまう無念さはどれほどだったかと思う。一昨年夏、体調を崩されたとき口惜しそうに話してくれて、それで論文執筆のプランが頓挫するのではないかと気にしていた。気弱な風情の石坂さんをほとんど見たことがなかったので驚いたし、それよりも健康回復が大事でしょうと応じたけど、そのプランもまずご家族のことを念頭においてのものだった。

父性の人であることと、含羞の人であることが、まったく矛盾していないのも石坂さんらしいところだった。会議の場にも、静かに照れているような笑みを浮かべながら現れるのが常で、それだけで周囲に安心感を与えてくれた。もう年来の付き合いとなったあとも、たまに私の個研を訪ねてくれるとき、必ずあのはにかんだ笑顔がドアから覗いたものだった。頑固で自分の考えを曲げないけど（「人の言うことぜんぜん聞かないんですよ、この人」と奥さんが怒ってたのを思い出す）、寛容な姿勢は変わらない。どんなことがあっても決して声を荒げることなく、こちらがかりかり怒ったとしても、不思議なほどどこまでも鷹揚だった。

石坂さんと知り合ってから20年余りのあいだ、最初の10年ほどはしょっちゅう酒席を共にしていました。楽しかった。後半の10年はお互いに忙しくなるばかりで、ビールのグラス片手にがやがやる機会もどんどん減っていきました。最後の機会となったのは、亡くなられた青山先生を偲んだ帰り、鍋島さんと3人でのことだった。奥様には内緒で、「ちょっと飲む？」と訊いてグラスにピッチャーから注ぐと、久しぶりだと言いながら美味しそうに飲んでいた。あまり体調はよくないんだとこぼしてたけれど、グラス片手ににっこり笑うのを見て、石坂さんならどんな奇跡でも可能なんじゃないかと強く思ったものです。

亡くなる前日の3月10日に送った最後のメールも、ずっとそうしてきたように「石坂さんへ」という呼びかけから始めたものでした。ご希望どおり次年度は授業担当義務から外れて、1年間じっくり療養していただく公式了解が得られたことをお伝えしました。呼びかけに応じてくれることはもうありませんでした。

訃報が届いたのは日本中が決して忘れることのない日付で、まるで自分のことも決して忘れるなよと悪い冗談を言っているみたいじゃないかと絶句しましたよ。新聞には前日に亡くなった山口昌男の追悼記事が載っていた。そうだ、確かに石坂さんはトリックスターだった。